

專事  
村井靜馬編輯  
明治太平記

4532

562

館藏書台百教本前

四	二		四
八册	七號	三架	五函

自函一架一號



村井靜馬編輯

鮮齋永濯畫

官事  
許情  
明治太平記  
全

東京書肆 延壽堂藏版

明治太平記廿三編序

世有治亂事有得失自有世民以來未能免之也無亂何觀治有失焉者然後有得焉者夫四時更謝寒暑迭往品物流形莫有定處天道猶然况於人乎故楚之敗則晉之所以霸也垓下之悲歌焉知非漢祖之喜乎唯知者能推千古之盛衰觀利害之嚮察時而動與物相應故事莫不濟也彼晉楚則考之於載藉何如今日目視之心察之哉昔在 皇帝西狩于隱岐蒙塵南山將帥之子執國命者數百年今而政復於王室四海之內莫敢拒命焉可謂太平矣而東征西伐內憂外患相繼使吾人愕然意失兇乎心懼者幾于茲乎于嗟是固愚人之所以為懼知者之所以為樂哉吾聞之知者不遺物况此一冊子足用殷鑑乎讀者而記西征之苦則國家久寧矣亦所以助知也

明治十三年三月

福島順則識



村井靜馬編輯  
鮮齋永澤畫

官事明治太平記全

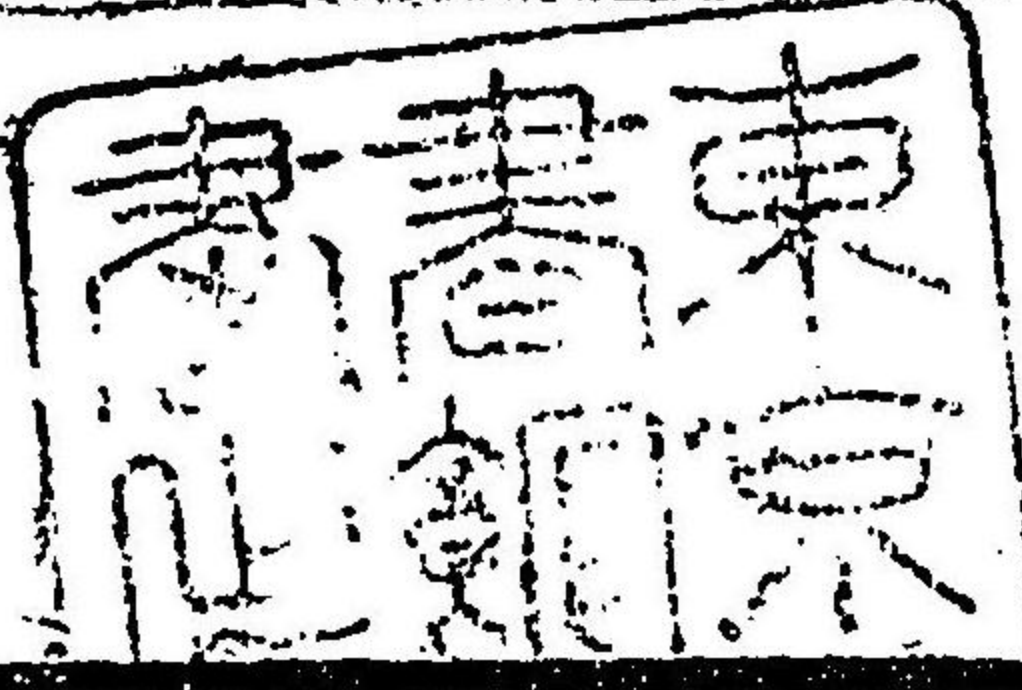
東京書肆 延壽堂藏版

明治太平記廿三編序

世有治亂事有得失自有世民以來未能免之也無亂何觀治有失焉者然後有得焉者夫四時更謝寒暑迭往品物流形莫有定處天道猶然况於人乎故楚之敗則晉之所以霸也垓下之悲歌焉知非漢祖之喜乎唯知者能推千古之盛衰觀利害之嚮察時而動與物相應故事莫不濟也彼晉楚則考之於載藉何如今日目視之心察之哉昔在 皇帝西狩干隱岐蒙塵南山將帥之子執國命者數百年今而政復於王室四海之內莫敢拒命焉可謂太平矣而東征西伐內憂外患相繼使吾人愕然意失兇乎心懼者幾于茲乎于嗟是固愚人之所以為懼知者之所以為樂哉吾聞之知者不遺物况此一冊子足用殷鑑乎讀者而記西征之苦則國家久寧矣亦所以助知也

明治十三年三月

福島順則識







三好少将



野津少将

日清大斗言 十三巻一



伊東海軍少將



岩村縣令





# 卷之一

星山及び尾捕の攻撃し始  
 まる江の嶽の山頂と賊の  
 去る終る

# 卷之二

賊兵の道転トて濱子よ  
 出るし始まり伊東少將倉  
 中よ戦ふし終る

## 明治太平記 七三編卷之一

東京 村井静馬著

諸説八月十日第一旅團の一軍を星山及び尾捕  
 七ツ山に向ひて攻撃を星山口へ大山と突つて陷  
 一荒平と抜きて窪村及び城村よりくる賊の軍  
 勢何より以てたまるべき舟に乗トて皆遁去  
 る七ツ山及び尾捕道へ村石峠中山推野等と攻  
 て陷る賊と歌護山を撃つ賊又支ゆると能る



我兵尾撃して城村の兵と連絡を十一日第一旅  
 團の兵夜中網の瀬川の漲ぎる流を横切りて  
 山砲數門を排置して賊壘を火攻を賊の走ると  
 尾撃して平野等を奪ひ右に轉じて一山脈を浴  
 ひ進んで残る所の賊を撃つ賊の甲斐の木峠に  
 據つて防ぐ我兵三面より圍まれと圍む賊堅く守  
 るて屈せむ我迂回兵其左翼より出ると銃槍を以て  
 之と突く爰に於て賊遂に支ゆると能く壘を

棄て走る昨日畧取するところの荒皮田村より  
 五箇瀬川を隔て大砲二門を以て押端村を火  
 きて我兵三道より進み撃つ賊杉の木峠に支ふ  
 我兵もつて銃鎗を以て突撃して賊を走らし  
 曾木川を渡りて曾木の山腹にわたり對陣を右  
 翼の兵の宇野間に入りて延岡の地方にむくひ  
 左翼の兵の新川口網の瀬川の上流水の減ゆる  
 と以て其所に橋を架して進み大桶及び乗越峠



と占む十二日第一旅團は當る所の宇納間口の  
 賊に至つて弱く曾木口の賊に至つて強きあり  
 後之と聞き曾木口へ賊魁桐野利秋自ら指揮  
 する所とりし此日宇野間をわたり別働第二と  
 連絡を我右翼の第四旅團及び新選旅團の細島  
 よう延岡に向ひて進撃するは賊門川を隔て  
 大小砲を撃ち放つとと霰と村雲より翻るが如  
 し新選兵隊を上流と涉りて賊の側面に出で

戦ふ賊遂に防々あて能くば一と潰え走る二  
 旅團兵も俱に尾撃して河側の小丘に據る  
 門川の賊は桐野等の指麾するところと云ふ十  
 三日第一旅團延岡進入の部署と定め曾木口を  
 曾木と抜き岡本村に戦ふ上中尾口の兵も賊  
 の左翼は出て石神口の兵は已に立花峠と陥る  
 進んで賊の右翼は出づ賊是に於て岡本を保つ  
 らんと能くば上中尾口の兵と曾木口の左翼とを





門川を隔て桐野利秋賊軍と指麾を



して前進し賊を渡り赤石を破る賊高野の山上  
 に據りて動くを我が三道の兵一時に併せ進む大  
 砲二門を以て射撃を賊防とあり能く遂  
 に潰え走る我兵尾撃して延岡の近傍よりする  
 賊の元城山を據りて砲撃を時已に午後七時と  
 過るを以て軍を救めて退く別働第二旅團の先  
 鋒隊第二旅團の兵と俱に賊を破りて其夜秋元  
 の軍を互ひし先鋒と競ふを以て別働第二の兵

の夜を冒して檜木大野に進む十四日第二旅團  
 別働第二旅團と俱に暗夜を衝き競ふ延岡に  
 進む始め二旅團路の右の方の第二旅團路の左  
 の方へ別働第二と定む既にして両軍互ひし先  
 と争ふ然まども山間の小径左を大河漫々と  
 て岩は砕け波濤となり右を數十丈の断崖に  
 して一歩を愆つとた忽ち黄泉に趣くの客と  
 あるは苦む此時賊の兵と三軍に分ち一軍の



門川より掘りて第三第四旅團を防ぎ一軍の第一  
 旅團は當り一軍の豊後口を拒ぐ別働第一旅團  
 門川の上流を渡り潰る賊と尾撃して先づ延岡  
 城に至る賊を百間橋に大砲を設け守備を我  
 兵奮激しておまを破りて城下に入る時午前  
 七時より生獲のもの云ふ桐野利秋の池上某の  
 家に入りと我兵争ふと赴くとたる既に脱して  
 影をい袋中仍不暖らるる紙帯べりと其急なる

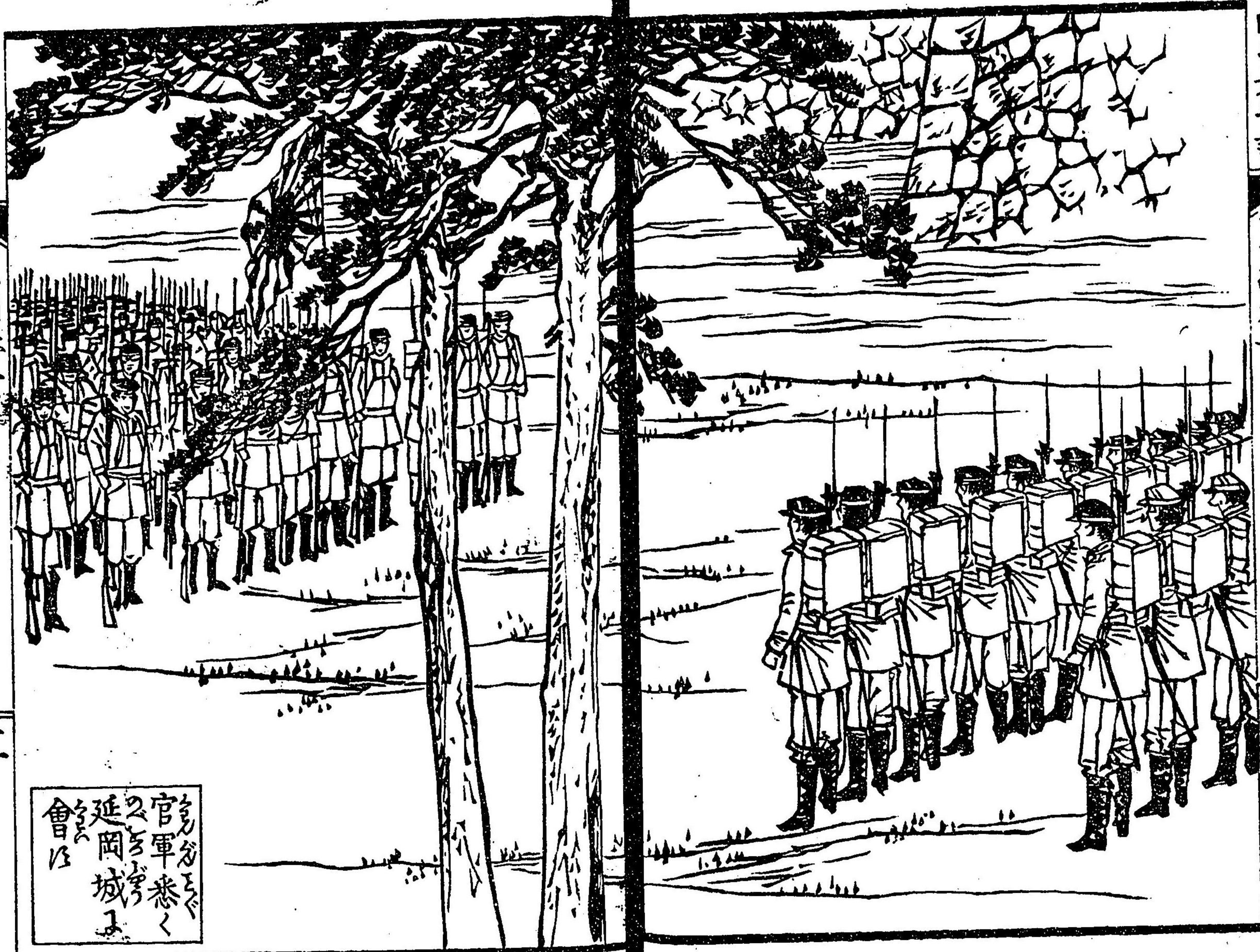
おと察し知るべし此日拂曉第一旅團延岡に進  
 入せんとし賊の来り襲ふと遇ひるとと戦ひと  
 後城下に入る同日昧爽第四新選二旅團もまた  
 門川より大小砲を発しと加草村口に至る此地  
 海に臨み山を負ひ一夫能くおまを紙防がハ万卒  
 一當るべしとり人の地勢なり正面は二重の堅  
 壘あり竹柵を構へと突撃を備へ沿道山腹の要  
 所は數百壘を設く而して一の守兵を我兵怪



一進まば斥候の兵と出して之を窺ふは全  
 く其守備を撤するは似たり遂は長驅して延岡  
 に入るるとたる山道の軍已に城下は充つ是に於  
 てをドめく賊の熊田は走ると聞き直ち兵と  
 進めておと追ひ遂は無麿の山は遇ふて之と  
 戦ふ此夜賊呐喊来襲して我軍頗る苦戦を終夜  
 砲声絶ゆるあたる十五日官軍悉く延岡は會  
 合昨日以来降伏の賊徒各旅團の軍門は相繼ぐ

既にして賊徒追撃の部署と定め第四旅團別働  
 第二旅團と右翼と一第一第二旅團と左翼と一  
 と進撃し第三旅團を以て延岡中外の守備を充  
 つ此時第四旅團は既は大武村に戦ふまを攻  
 撃兵の右翼とるを而して無麿の山に向へり別  
 働第二旅團は左翼とありて長尾山に向ふ無麿  
 の山の峯五ツありて長尾山其西は横つる両山  
 の中間と重岡街道とに所謂梓越は是あり長尾





官軍悉く  
延岡城に  
會は



山の西北江の嶽の高山天と聳ゆは是後日賊の  
一走路と博するの所あり無廢の山の東の一峯  
の既よ我軍の有とある賊兵の其四峯と長尾山  
よ扱りに砲戦を既よ一と第四旅團を奮進一と  
その第二峯と奪ひ大砲と置きて絶えを射撃を  
賊もまた左側の一峯よ扱いて砲撃を賊兵忽ち第  
二峯よ向ひ呐喊とつろりて刀と揮ひ衝突して  
登り来る我兵防ぎり極く一旦山下よ卻く既よ

してまた奮進して賊と山の麓よ追下して進んで  
北川の下流と渡り河よ沿ふ所の賊壘と抜き戦  
線と張りて北川よ船と架せんとす此日攻撃兵の  
左翼別働第二旅團の地形と按つて兵と部署し  
山下の稻葉崎村よ大砲と設く山田少將いま  
進撃の令と布らむ我軍銃と装して待つ既ふ  
て山上の大砲二發する所聞く忽ち関の声大よ  
起り堂が坂小梓越より千餘の賊兵一團とあり



て研つて入る来る山上の賊一齊は大小砲と乱  
 突を其勢ひ疾雷の耳と掩ふ及むざるよ似  
 り夫卒の如きハ驚きて我軍既は敗るるとる  
 追を走る將校士卒おのく陣を固めて應戦を  
 進退大ひよ度よ適ふと以て賊徒縦横乱斫死  
 と期して暴戦をと雖ども我が陣脚山の如くよ  
 して少くも撼くあとも一時は我軍嚮きよ分ち  
 遣る処の右翼兵漸く進んで左翼の賊と山上よ

追登せ顧みて賊の我正面兵と戦ふと望と忽ち  
 一隊と分ち来りて賊の側面を衝く賊らふ於て  
 退脚の色と顯し我左翼は廻り小梓越の賊の合  
 まるり至乱進して我が砲隊を侵さんとする  
 り劇戦仍く一時と過ぎ賊漸く疲きて散れ走る  
 我が軍勢ひよ乗じて長尾山の半腹よりころ時  
 り我が右翼兵を山の麓の胸壁を奪ひよ漸々堂  
 が坂よりころ堂が坂正面長尾山小梓越俱よ天



嶮の地ありおとよ扱るよ必死の悍賊と以て  
 大小砲と惜まば射下をその勢ひ百千の雷の一  
 ト時よ落かぐるよ異らむ我兵いまご突き前むも  
 のま一時よ堂が坂正面よ向へる蒲生郷の降伏  
 人一中隊陣前よ突出し関の声と発し銃鎗と翳  
 して一死簇とありと賊墨よ突て入る賊の兵卒  
 と十字よ配しと狙撃をまどとを撓まむまをく  
 進んで墨下よ至る此時山縣參軍始め各旅團の

將校皆来り會して此よ注目を我右翼兵又突進  
 して一齊よ刀と揮ひと賊墨よ逼る賊も又抜刀  
 して出て戦ふ我兵刺斫しと賊と尽し大呼して  
 猪撃を賊逐し銃砲と指て八方よ走る我兵進ん  
 で山壘數十と抜き小梓越し又仰いで長尾  
 山と攀る此時賊の長尾山の半腹大樹の蔭よ碍  
 て我左翼兵と拒ぐ既よして右翼の堂が坂小梓  
 越既よ陥る彼望しと勇氣皆沮喪へり我が右翼



浦生郷の  
降伏人賊  
墨と突前  
ま





兵の勝一乗トて進至る勢ひ狩獅の如きと望  
と遂一大崩れ潰也我軍進んで長尾山を奪ふ  
此日捕虜の言は因まば西郷桐野らづら軍を  
指揮せとり始め桐野が鹿兒島と出るや衆は  
謂つて曰く今我東上を我に當るものへ夫を山  
田う山田の吾と俱は奥羽の役は従事し互ひ  
相推重を今東西相分是と其伎倆と試るよら  
るも亦奇遇ありと今日西郷桐野等が智勇既

窮を後日たる何の策ふり出る十六日第四旅團  
を賊が退き老田山の絶頂に屯集するは見て  
又進んで砲撃を賊の來り襲ふものなり撃てと  
して後走らま十七日第四旅團へ浦尻越と踰え  
浦尻と抜き前を進んで豊後口の軍と連絡と通  
ト老田山より大小砲と射撃し長井村に出没を  
る賊兵と攻撃を賊の本營へ長井村に在り故に  
砲九屢々本營に達を老山田の西の峯に賊の一







十八日夜未だ明けぬ江の嶽の山頂に當りて砲  
声四方に聞ゆ諸軍大に恠しむ既にして諸隊は  
傳遞せ此日午前一時過ぎ大霧山巔を包みく尺  
又と辨し難きに乗て我兵線と断ちて賊兵一群  
江の嶽の山頂に出ると然れども部署嚴整み  
て諸軍赴き援ふと能く後よその脱する者ハ  
賊魁ありて知り急よ部署と變て諸軍をして  
追蹙せしむ江の嶽山々第一第二旅團の攻守線

に属し二旅團の前軍既に道と左右に分ち哨兵  
線を進め長井の本營に向ひ賊喉と扼し賊背と  
拵んとす故よ山巔假りよ設くる所の中堅衛兵  
頗る寡し賊魁既に偵りてあま後知り死士四百  
と撰と鎌と携へ斧と擔ひ道と啓くその三十餘  
人よ先導せしめ断崖絶壁無徑の地と陟り潛り  
よ我が前軍の背に出る本營の哨兵線に至り巨  
砲一發関の声俄うよ起り一半ハ短兵急撃營と



賊兵と推方へ  
斧と荷ひ道と  
開く





斫る入る向ふもの披靡を営中事の急なる故以て  
兩少將と始め諸將校身と挺て遁る護衛兵殊  
死防戦して賊と卻つるあと三回賊の前軍營と  
衝て山巔と直下し曾木し向つて走る者あり我  
兵戦ひ急し且溪水横流まろ谷のりり遠し賊兵  
の山と下る谷遮るると得む加之我の寡し一  
彼の衆あり因り其鋭と避けざる故得む賊皆山  
と下り去る我が分遣の近衛隊溪間の要地と扼

まろ者賊の後軍と邀へ撃てあまると卻く賊退い  
て日の谷越し扱る而して賊の前軍走りて二旅  
團本營の兵廠と衝きて糧食等と奪ふ二旅團兵  
の一旦卻くまろ進んで賊の一軍と遮る豊  
後口の兵又来り加ちり江の嶽山腹しあはる賊  
の三面と圍む官賊ともし砲戦を既し一と夜一  
時賊の砲声熄む我軍急し進んで賊の屯所し至  
るに既し賊の隻影るし賊まろ暗し乘して漸々



16  
48  
54

明治太平記

山を下りて去る後、知る前の本營を衝き去る者、賊の前軍より、後の山腹に圍まると、その其後軍ありと、丁數限り、あまは巻とかんて猶説くべし

明治太平記廿三編卷之一終



